

教員名	伊藤 るり (ITO Ruri)
所 属	ジェンダー研究センター
学 位	社会学博士
職 名	教授
URL/E-mail	http://www.igs.ocha.ac.jp/ ruri@cc.ocha.ac.jp

## ◆研究キーワード

国際移動 / ジェンダー / グローバル化 / アジア / 沖縄

## ◆主要業績

総数 (3) 件

- ・ 1. ITO, Ruri, 2005, "Crafting Migrant Women's Citizenship in Japan: Taking "Family" as a Vantage Point," International Journal of Japanese Sociology, No. 14, 52-69.
- ・ 2. 伊藤るり, 2006, 「1920～30 年代沖縄における『モダンガール』という問い——植民地的近代と女性のモビリティ——」, 『ジェンダー研究』第 9 号 (お茶の水女子大学ジェンダー研究センター), 3 月, 1-18 頁.

## ◆研究内容

主として以下の 2 つのテーマに関する研究を進め、成果発表を行いました。

1. アジアにおける移住家事・介護労働者の展開とジェンダー配置に関わる研究 (21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア」、及び科研費補助金による)。

(ア) 学会報告：

・ “Internationalizing Reproductive Labor in a Super Aged Society? Japan's New Immigration Policy and Its Implications on Care Work” (Women's Worlds 2005, Seoul, Korea)

・ 「女性移住者にとってのシティズンシップと『家族』——滞日フィリピン人女性移住者の事例を中心に——」 (日本社会学会シンポジウム)

(イ) 調査研究：

・ 台湾における移住家事・介護労働者受け入れの実態に関する調査 (共同研究)。

(ウ) 論文発表：主要業績の 1.

2. 東アジアにおける植民地的近代とモダンガールに関する研究、特に沖縄の事例研究 (科研費補助金による)。

(ア) 講演：「沖縄にとっての＜モダンガール＞という問題——移動する＜女＞を手がかりに——」 (なは市民センター講座)

(イ) 研究会報告：「モダンガールと女学校文化の形成——沖縄県立女子師範学校と第一高等女学校をめぐるメモ」 (モガ研究会)

(ウ) 論文発表：主要業績の 2

## ◆教育内容

1. 学部

・ 国際社会の課題としての「ジェンダー平等」について、国際機関、各国政府、NGO 等がどのように取り組んでいるのか、グローバル化や南北格差拡大との関連で、多角的に検討する授業を行いました。授業科目名：「比較ジェンダー論」(人間生活学科共通生活社会科学講座) / 「国際ジェンダー論」(グローバル文化学環)

2. 大学院

・ 博士前期課程発達社会科学専攻開発・ジェンダー論コース： 人の国際移動がどのように開発過程にかかわるかを概説したうえで、受講者が国際移動のジェンダー分析の手法と主要な概念を習得し、批判的検討が行えるよう、事例研究の講読 (英語文献を多用) と討論を中心に授業を組み立てました。このほか、国際社会学の分野に関心のある学生の修士論文指導にあたりました。【科目名】「比較ジェンダー開発論」「比較ジェンダー開発論演習」

・ 博士後期課程ジェンダー学際研究専攻・ジェンダー論講座： 「ジェンダーとシティズンシップの政治社会学」を主題とし、文献講読を行うとともに、学位論文や投稿論文の準備を行う受講者に発表の場を提供し、論文内容のレベルアップを目指しました。【科目名】「国際女性開発論」「国際女性開発論演習」

## ◆Research Pursuits

---

In the year 2005, I have conducted research for the following two projects: a) migrant domestic and care workers and gender configuration in Asia, and b) the question of “modern girl” and colonial modernity in East Asia. The former was funded by the 21st Century COE program “Frontiers of Gender Studies” and also partly by the Ministry of Education’s Grant-in-Aid for Scientific Research, of which I am the head investigator. The latter is based at the Institute for Gender Studies and is also funded by the Grant-in-Aid for Scientific Research.

- article (English only)

・ ITO, Ruri, 2005, “Crafting Migrant Women’s Citizenship in Japan: Taking “Family” as a Vantage Point,” International Journal of Japanese Sociology, No. 14, 52-69.

- conference paper (English only)

・ “Internationalizing Reproductive Labor in a Super Aged Society? Japan’s New Immigration Policy and Its Implications on Care Work” (Women’s Worlds 2005, Ewha Womans University, Seoul, Korea)

## ◆Educational Pursuits

---

1. “Comparative Gender Studies” (undergraduate course) focused on the question of “gender equality” within the context of globalization and the North/South divide. It introduced students to some of the theoretical and conceptual frameworks for obtaining a critical understanding of “international feminism.”

2. “Comparative Gender and Development Studies” (master program) dealt with gender analysis of international migration and its relations to the development process.

3. “International Gender Studies” (doctoral program) was composed of two parts. First, students were asked to work on selected readings on the question of citizenship and gender. Second, those who were preparing their doctoral dissertation were asked to present draft chapters, to which peers gave critical assessments and useful advices.

## ◆共同研究例

---

- ・「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール」（科研費補助金による国内外研究者との共同研究）
- ・「再生産領域におけるグローバル化とアジア」（科研費補助金による国内外研究者との共同研究）

## ◆将来の研究計画・研究の展望

---

1. 日比経済連携協定で、フィリピンから上限合計 1000 人の看護師、介護福祉士の導入が合意された現在、いよいよ日本も、アジア諸国で見られる再生産労働の国際分業に関して、直接的利害当事者となったといえます。高齢化する日本社会で移住労働者（その多くは女性）が果たす役割はいかなるものとなるのか、その労働、技能、人格が十分に尊重される社会をどのようにつくっていきけるか——これらの点について、国内外の研究者や NGO と連携しつつ共同研究を進めていけたらと考えています。

2. 沖縄女性にとっての植民地的近代と移動の経験

## ◆受験生等へのメッセージ

---

グローバル化の動きは、ジェンダー秩序をどのように変容させるのか（あるいはさせないのか）。この点を、主として国際移動という現象をつうじて検討したいと考えています。

また、グローバル化のもとで競争と格差拡大にさらされ、民族的多様性と市民的地位の多元化が増大する社会において、どのような「平等」や「連帯」の概念が可能なのか。こうした点にも強い関心をもっています。授業では、そうした社会的課題をいっしょに考えるためのツールを一つでも二つでも、身につけていただきたいし、独自の発想で練り上げてほしいと思います。